

目指せ！世界遺産登録



玉川上水



新堀用水の小川橋下流にある「ほっこめき」(右下)について話す辻野五郎丸さん(小平市で)

江戸の市中に多摩川の水を届け、玉川上水。近年、世界遺産登録へ向けた取り組みが熱を帯びつつある。「市民が選んだ玉川上水・分水網関連遺構100選」はその一つ。選定に協力した市民団体や研究者らは、江戸時代の高度な土木技術や東京の発展の歴史に光を当て、世界遺産登録への足がかりとしたい考えだ。

市民が選んだ遺構100選



立川市の千手小橋から玉川上水にホタルの幼虫を放流する児童



小金井分水にある山王の築樋(小金井市で)

「活動を始めた二十数年前は「なんであんなドブ川が世界遺産になるの」と笑われた。登録まで何十年とかかるかもしれないけど、ようやく入り口まで来たんだ。玉川上水流域の二十二の市民団体などをつくる「玉川上水ネット」事務局長の鈴木利博さん(八)は、苦勞を振り返りつつ前を向いた。100選は二〇一九年に「玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会」が選定した。連絡会は約七十の市民団体などで構成され、多くの研究者も名を連ねる。歴史の解説文や写真を掲載した資料を作り、市民団体が展示や講演で活用している。メンバーの案内で、100選の一つ、「青

玉川上水の歴史

江戸期	1653年 玉川上水の工事が始まる
	54年 完成した玉川上水から市中への通水が始まる
	57年 明暦の大火が発生。江戸郊外に移住した人々向けに分水が発達し始める
明治	1870年 玉川上水で通船開始。分水口の数を整理する
	72年 水質悪化で通船廃止
	98年 淀橋浄水場が完成。玉川上水を水道水として使うようになる
昭和	1965年 淀橋浄水場が廃止。小平監視所より下流に水が流れなくなる
	86年 多摩川上流水再生センターで処理した再生水が小平監視所より下流に流れるようになる

小川分水の歴史について語る鈴木利博さん。小平市の農家の敷地を流れ、今も野菜洗い場として使われている



「100年先も残すため」活動に熱気

梅街道沿いの小川分水と新田開発を訪ねた。小平市の農地を流れる小川分水は、江戸前期に新田開発のため、玉川上水から水を引いたという。初期の分水の一つで、今も野菜を洗うために農家が利用している。小金井市の「小金井分水・山王窪の築樋遺構」では、水路と河川を交差させ、双方の水が混ざらないようにした「築樋」と呼ばれる工事の痕跡が確認できる。一六九六(元禄九)年、市内を流れる仙川の上を横断する形で土手を築き、その上に小金井分水を流した。仙川の水は土手の下のトンネルに通し、流れを阻まないよう工夫したことが分かる。

明治以降の遺構も選ばれている。「分水改正と新堀用水」は、一八七〇(明治三)年に玉川上水の通船開始に伴い、上水の北側を並行して流れるように開削された新堀用水の小川橋付近の「ほっこめき」(小平市)というトンネルを取り上げている。「ほっこめき」は水を上流よりも高い場所へ流す手法で、幕末期から用いられたという。小平監視所(立川市)から下流に再生水を流す放流口なども選定された。

世界遺産登録には、保全活動も欠かせない。「玉川上水ネット」の活動は、羽村取水堰(羽村市)から皇居までを歩き、遺構などを調査する「玉川上水リレーウォーク」などが評価され、二〇一六年に日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」に登録された。

同ネットに所属する「玉川上水の自然保護を考える会」は、立川市内の小学校などと連携し、玉川上水で約三十年間、ホタルの幼虫を放流してきた。同会会長の萩本悦久さん(モ)は「ホタルが飛び光景は、玉川上水に今もきれいな水が流れていることの証明になる」と意気込む。

ただ、登録には大きな壁もある。「玉川上水を元の姿に戻せるかどうか」と連絡会事務局長の辻野五郎丸さん(モ)も。小平監視所から下流の流れは一九八六年に復活したものの、流しているのは再生水で、それも杉並区の浅間橋まで。浅間橋から終点の四谷大木戸(新宿区)までは地下でつながっているが、水はない。

そこで連絡会では、羽村取水堰で取り込む水量を増やし、多摩川の清流を四谷大木戸や皇居の外堀まで流し、堀の水を浄化するという構想も練っている。辻野さんは「水路は水を流さない」と形が失われていく。百年先も残すため、どのような活動をするかを考えていきたい」と話す。

文・松島京太 / 写真・中西祥子、内山田正夫、松島京太 / 紙面構成・宮本直子